

課題に対して「SDGs」を通して考える“私のアクションプラン” － JICA 教師海外研修の学びを通しての授業実践－

田中 駿一

1. はじめに

本実践報告は、筆者が2017年夏にJICA 教師海外研修に参加し、そこで得た知見を前勤務校であった東京都立六郷工科高等学校で実践したものである。

まずは、JICA 教師海外研修がどのような目的で行われているのか述べていきたい。毎年7月から8月にかけて、独立行政法人国際協力機構東京センター（JICA 東京）が主催する国際理解・開発教育に関心を持つ教職員を対象にして行われる研修である。その具体的な目的としては、1つ目に、国内研修と海外研修を通じ、世界が直面する開発課題及び日本との関係、国際協力の必要性に対する研修参加者の理解を促進すること。2つ目に、研修参加者による学校現場等での授業実践を通じ、開発課題を自らの問題として捉え、主体的に考える力、またその根本解決に向けた取り組みに参加する力をもつ児童・生徒を育成することとある。

そもそも私がこの研修を知ったきっかけは、過去に本研修に参加した他校の生物科教員の話聞き関心をもったからである。入都以来、自身の専門教科だけでなく、教科や学校種を問わない研修や勉強会に参加していたこともあり、その縁があって知ることができた。近年、学校教育の在り方が問われ始めており、従来より続けられてきた工業化社会の一員としての人材を輩出することが目的とされてきた授業方法の改

善が叫ばれている。また、様々な家庭環境や背景をもつ生徒が増えていく中で、学びに対して後ろ向きな姿勢をもつ生徒も一定数いる。多様な考え方や価値観をもった生徒と関わる中で、海外の子ども達が学びに対してどのように向き合っているのか。学校教育やその他教育をどのように捉えているのかを知り、これからの学びの在り方をより模索していきたいと考えた。また、教科書の内容だけにとどまらない、研修を通じた直接体験から、国際社会が抱える問題や環境問題といった持続可能な社会づくりとは何かを生徒と共に考えていく授業づくりをしていきたいという強い思いから、本研修への参加を志望して、2017年夏に参加することに至ったのである。

研修では、2か国の中からどちらかを選択することになる。私が参加した年度は、東南アジアのベトナムとアフリカのザンビアがあった。私は勤務校が工業高校ということもあり、日本と経済的にも繋がり深いベトナムを訪れた。現地では、小・中学校や少数民族の村、ハノイ市内でのホームステイ、日本の政府開発援助によって行われている事業などを視察した。海外での研修を終え、主に2学期に現地での学びを授業に落とし込んでいった。

教師海外研修は、海外訪問とその後の授業だけでなく、JICA や専門家による開発教育の在り方、国際理解教育の理念など多岐にわたる研

修の場が用意されている。そのプログラムや日程、他の実践報告の仔細は、JICA の案内等を参考にいただき、以降は、私とその研修からどのような授業を計画し、実践したのかを報告したい。

2. 学校・対象の概要

前勤務校である東京都立六郷工科高等学校は、プロダクト工学科、オートモビル工学科、システム工学科、デザイン工学科、デュアルシステム科の5つの専門学科を設置している。卒業後の進路として就職をする生徒が3分の2近くを占めている。特にデュアルシステム科では、地域企業へのインターンシップ（長期就業訓練）を実施しており、とりわけ卒業後に職業人となることを意識して生徒自身が学びを深めている。よって授業も大学受験を念頭に置いた支援というより、就職試験に合格できる基礎学力の定着や卒業後に活かせる社会人基礎力を養うことを視野に入れた支援や授業実践を意識して行っていた。

なお、本実践報告での対象は高校2年生の選択教科「地理A」である。地理への興味・関心があって選択した者もいれば、逆に他教科の授業と相対的に比較して選択した者など、受講の動機はさまざまである。学期当初から授業実践（11月）までの様子を見てみると、授業に対して前向きに受講し、授業プリントや課題を比較的積極性をもって取り組んでいる。

3. 実践

3.1. 実践の概要

本単元は地理Aの学習指導要領(1)「現在

世界の特色と諸課題の地理的考察」に含まれる領域である。そのねらいとして、環境・資源・エネルギー、人口・食料及び居住・都市問題を地球的及び地域的視野からとらえ、地球的課題は地域を越えた課題であるとともに地域によって現れ方が異なっていることを理解させ、それらの課題の解決には持続可能な社会の実現を目指した各国の取組や国際協力が必要であることについて考察させることとした。

実践にあたっては、本研修で学んだことを構成した“特別な授業”ではなく、教科書における単元の位置づけを明確にした授業デザインを行った。具体的には、『高等学校 新地理A』（帝国書院）の第3章「世界の諸地域の生活・文化」の3節「東南アジアの生活文化」5「東南アジアの経済の発展と生活の変化」と第4章「地球的諸課題と私たち」2節「世界の環境問題」1「さまざまな環境問題」とを複合させた形をとった。

表1は単元の構成であるが、軸として、「知る」→「共通項を考える」→「提案する」という流れを計画した。学習目標として、「国際的な諸課題やベトナムと我が国の問題を相対的に比較・検討することで理解を深め、その中で望ましいコミュニティ形成のために自身ができることを考える力を養うこと」を設定した。態度目標として、「フォトランゲージやアクションプランを作成することを通じて、他者の考えをしっかりと聞き、また自身の考えや思いを他者に伝達できる力を身につけること」を設定した。態度目標を意識させているのは、先述したように勤務校が職業高校であることに起因する。卒業後の進路として就職する生徒が7割近くを占めるため、社会に出てから求められるコミュニ

時限	小単元名	学習のねらい	授業形態
1	ベトナムという国での体験・経験	ベトナムの国としての現状、その雰囲気を追体験し、理解する。	講義型授業
2	日本のODAと世界的諸課題とは？	日本の開発援助の様子や世界的課題に対して、興味関心をもつ。	講義型授業
3	ベトナムが抱える課題・問題とは？	4枚の写真からベトナムが抱える問題・課題を理解する。	グループワーク フォトランゲージ
4	コーヒーカップの向こう側	コーヒーの視点からSDGsを考える。	グループワーク
5	日本が抱える課題・問題とは？	4枚の写真から日本が抱える問題・課題を理解する。	グループワーク フォトランゲージ
6	理想のコミュニティとは？1	持続可能な社会を実現するための理想のコミュニティは何かを考える。	講義型授業グループワーク
7	理想のコミュニティとは？2	持続可能な社会を実現するためのアクションプランを他者に伝える。	講義型授業グループワーク

表1 単元の構成

ケーション能力やプレゼン力などを授業の中で少しでも養っていきたいと考えていたからである。

その他、授業では自作のプリントと教科書を活用し、授業冒頭では、単に情報を伝達するだけでなく、「KP法」とよばれる「紙芝居プレゼンテーション法」を用い、B4用紙にキーワードや簡単なセンテンスを黒板に貼る作業を通じて説明し、授業冒頭において本時の枠組みや概要を大まかに掴んでもらうことを行った。また、授業内では適宜生徒が感じたこと、考えたことを共有できるような場を設定した。そして、振り返りでは単元学習の前後にOPPA(One Page Portfolio Assessment)の考え方に則ったOPPシートを、毎回の授業ごとに「大福帳」とよばれる振り返りシートを活用し、各授業のタイトル付けをさせる等、形成的評価の観点から、生徒の授業前と授業後の学んだことの比較

や変容、さらに単元全体を通しての自身の変化を省察する時間を設けた。

以上が本実践の概要となるが、以降では各時限の簡単な概要を述べながら、第3時限目と第6・7時限目の具体的な指導事例を紹介していきたい。

No.1 【学習前】
 ○ベトナムとはどのような国でしょうか。
 また、日本がどのようにベトナムに関わっていると思いますか。

No.2 【学習後】
 ○ベトナムとはどのような国でしょうか。
 また、日本がどのようにベトナムに関わっていると思いますか。

課題に対して「SDGs」を通して考える“私のアクションプラン”

2年 組 番

氏名

○学習前・学習中・学習後を振り返ってみて、何が分りましたか？
 ○新しくわかったこと、考えたことに対してあなたはどう思うようになりましたか？
 どんなことでも構わないので、書いてみましょう。

●授業を終えての感想・感想があれば書いてみましょう

資料1 OPPシート

3.2. 授業実践 (1・2 時限)

1 時限目は、本単元の導入にあたる。冒頭では、単元を貫く大きな問いである「いま日本が抱えている課題（労働問題・環境問題・健康問題等その他）に対して、あなたができることは何があると思いますか？」に対して、OPPシート（資料1）に記入していく。そこでは、節電、節水、ごみの分別等、単語レベルの回答やメディアでよく耳にする文言の記述が目立った。この大きな問いは一連の学習を終えた単元の最後にも行わせる。

その後、ベトナムが東南アジアのどこにあるかという位置の確認とイメージを考えてもらった。そして、教科書の文章や写真、私が撮影したハノイ市内や少数民族の村、ベトナム戦争に関連する施設などの写真を提示し、そこからわかる情報をアウトプットしてもらい、既有知識と写真や文章からわかったベトナム像の情報と比較させる。すると、多くの生徒が「発展途上国ベトナム」のイメージをもっていたが、「新興国ベトナム」としての姿や日本との関わりについて新たな知見を得た様子だった。

2 時限目は、JICA が携わっている政府開発援助の事例を紹介しながら、「国際協力は必要なの？」という問いに対して、「国際協力は必要である」という立場でどう答えるか、というワークをした。「国際協力は必要ない」という考え方をもっていた生徒にとっては難しいようだったが、人間の安全保障、地球規模課題への対応、相互依存性の深化の3つの観点で話を進めていくと、今の時代は1つの国・地域よりも多くの国々で課題を解決しなければならない現状に改めて気付かされた生徒が多かった。授業

の最後に、SDGs（持続可能な開発目標）の考え方について触れ、身近な出来事と17の目標を結びつけるワークを行った。中には夏に行ったインターンシップ先の企業研修でSDGsを学んだ、という生徒もおり、社会で求められている考え方が学校の授業とリンクしていることで、より意識的に学習に臨む姿勢が見えた。

3.3. 授業実践 - ベトナムが抱える課題・問題とは？ - (3 時限)

【授業の目標】

- ①ベトナムが抱えている課題や問題を認識し、その課題・問題点を考察する。
- ②ベトナムが抱えている課題や問題をSDGsの3つの目標との関連性を考察し、他者に伝えることができる。

【授業の流れ】

- ①前時に学習した日本のODAの概要や国際協力の必要性について、KP法で説明をしながら復習する。前時で紹介したSDGsの考え方が本時では問題を解き明かすポイントになることを示唆し、17の目標の考え方についても復習をかねて丁寧に確認をしていく。
- ②SDGs目標の中でも、特に今回は、「3 すべての人に健康と福祉を」、「4 質の高い教育をみんなに」、「8 働きがいも経済成長も」、「11 住み続けられるまちづくりを」に焦点をおいて取り扱うことを説明し、前時でも扱った日本の食卓にある「うな井」を例にして、どの部分がSDGs目標の3,4,8,11と関連があったか復習し、物事や事象とSDGsとの関連の理解を深めていく。

③現地で撮影した4枚の写真(資料2)を題材にして提示し、「4枚のベトナムの写真はSDGs目標(主に3,4,8,11等)のどれに該当しますか?」という問いを個人・グループで検討させた。まずは5分間、個人でワークシートに記入をし、その後にそれぞれが検討したものをグループ内で共有する。共有後、各グループのメンバーから出てきた意見を黒板に集約する。その板書に応じて授業者からSDGsに関する解説を加えていく。



資料2 ベトナムで撮影した4枚の写真

④続いて、「4枚のベトナムの写真はどのような写真ですか?」という問いを個人・グループで検討させた。4枚の写真は、資料2の左上から、「麻疹風疹混合ワクチン製造技術移転プロジェクト」、「ハノイの中心部」「ハノイ市内のとある川岸」「トゥイアン障害者リハビリセンター」の写真である。こちらも個人でワークシートに記入をした後に、それぞれが検討したものをグループ内で共有する。その後、各グループはメンバーから出てきた意見を授業者が集約して板書していく。そして、グループの意見をもとにして写真の内容を解説し、実際に現地で見聞きした情報を伝えて、SDGsとの関わりを説明し

ていく。

⑤本時で学んだ事柄をOPPシートに記入し、振り返りを行う。

【授業の様子・反応から】

教科書の文章や図だけでは、リアルなベトナムの課題や現状を具に読み取ることは難しいと考えた。今回、私自身が直接体験したベトナムでの写真を「SDGs」というフィルターを通してみることで、それぞれが孕んでいる課題などをうまく認識できた生徒が多かったように思う。また、写真から何を読み取れるか考察するフォトランゲージでは、人の見方や考え方によっては多様な解釈が生まれる。本時においても、混合ワクチンの写真では、何を表現しているのかがわかりにくかったようで、途上国のイメージが先行して、人体に悪影響を及ぼす薬なのではないか、という意見が出ていた。

一方で何人かの生徒は、授業者が指示した目標とは別の目標との繋がりを書く者もいた。視点が拡散した面においては、広い見方をしていたと考えられるが、まずは限定した中での目標をしっかりと理解し、課題と正対させることも欠かせない。今回は、SDGs目標を実際の複数の課題と繋げる初めての取り組みだったので、冒頭の問い立てで、目標を限定した形であることをより強調して伝達すれば目標と課題を深く考察できたのではないかと考えた。

3.4. 授業実践 (4・5時限)

4時限目は、開発教育協会の『コーヒーカップの向こう側』という教材を用いた。これはベ

トナムがコーヒー豆の生産量が世界でも上位になることを踏まえて、コーヒーの視点からSDGsを考えさせたかったからである。生徒が日頃身近に感じるコーヒーも私たちの口に運ばれるまでどのような問題があるのかを考察させた。

5時限目は、3時限目と同じ形の授業を今度は日本に視点を置いた。食品廃棄、異常気象、長時間労働、国会議員における女性の比率をテーマにし、SDGs目標と紐づけて、ベトナムといった諸外国だけの問題ではなく、私達が暮らしている日本でも課題となっていることを認識させた。

3.5. 授業実践 - 理想のコミュニティとは？ -

(6・7時限)

【授業の目標】

- ①これまでの授業から、SDGs目標の達成がほど遠いと評価されている分野が今後日本ではどのようにあるべきか、理想のコミュニティの在り方を創造することができる。
- ②理想のコミュニティの在り方を他者に対して、提案・発表をして、そのために自分自身ができるアクションプランを表現することができる。

【授業の流れ】

- ①これまでに学んだSDGs目標の3,4,8,11とベトナム、日本の課題との関わりをKP法で復習する。その上で、日本において未だSDGs目標の達成がほど遠いと評価されている分野（「5ジェンダー平等を実現しよう」、「12つくる責任つかう責任」、「13気候変動に具体的な対策

を」[15陸の豊かさを守ろう]）の①現状の認識、②理想像の在り方を考えること、を本時の目標として、ワークシートに取り組んでいく。

②現状の認識と理想像の在り方を個人で20分間かけてワークシートに記入していく。分からなかったり、アイデアが思い浮んでこなかったりする場合は授業者や友人同士で相談しながら取り組んでいく。

③各グループでそれぞれが書いた現状の認識と理想像を発表し合う。その後、授業者から例えばジェンダー平等であれば、男女の賃金格差や女性の国会議員比率であったり、つくる責任つかう責任であれば、食料廃棄率の問題であったり、4Rの推進など、日本社会における現状を補足解説していく。

④その解説を踏まえた上で、理想像を達成するコミュニティ（日本社会や地域社会）を目指すために、「自分自身がまず明日からできることは何か」という問いの下、生徒一人一人がコミットするSDGs目標とアクションプラン（未来への行動計画）を個人で考える。

⑤考えたアクションプランをグループ内で発表し合う。その後、単元の冒頭で考えさせた単元を貫く大きな問いである「いま日本が抱えている課題(労働問題・環境問題・健康問題等その他)に対して、あなたができることは何かがあると思いますか？」にもう一度取り組む。最後に、授業者から本単元を学ぶことの必要性やこれからの世界で起きる可能性のある課題を紹介し、

今回学んだマインドは社会に出たときに求められるのが大きいこと伝え、教師海外研修を題材にした単元を終えた。

【授業の様子・反応から】

6、7時限では、生徒自身の身近な問題で、それらが抱えている現実とあるべき理想像のギャップを比較して可視化するフレームワーク「As is/To be」を用いた。身近な問題の発見がまずは難しい様子であったが、見つけてみるとその現状の把握はすぐにでき、理想像のあり方については、SDGsの目標やこれまでに学んだ事柄を参考にしながら記述することができていた。可視化をすることで、何となくは見聞きしたことのある食料廃棄、生物の多様性の喪失、気候変動などの問題が現状と理想の差が大きいことを実感する様子であった。

最後に一人一人が立てたアクションプランは自身の実生活に根差したところからスタートする内容が多かった。「教室移動の際、部屋の電気をこまめに消す」「お昼の時、友人が嫌いなものを残した時はもらう」といった学校生活の中で意識していくものや「家でも再利用、再活用といったことを心掛けて実践していきたい」といった家庭の中で学びを活かしていくものも見受けられた。作成したアクションプランの振り返りまでは授業時数の関係もあり、行うことまではできなかった。しかし、教師海外研修で見てきた直接体験をもとに構成した授業実践は、インターンシップでも触れたことのあるSDGsの見方を加えたことによって、卒業後の、一社会人として考えなければならないよりリアルな問題への学びに繋がっていたように感

じた。

4. 終わりに

本稿では、JICA 教師海外研修の概要を紹介し、そこから学び得た知見を活かした授業実践を報告した。以下では、生徒が記述したOPPシートにある単元を貫く大きな問いの学習前と学習後の比較をいくつか紹介したい。

●男子生徒 A

【学習前】働きすぎやブラック企業問題。調べたりして知ること。

【学習後】地球温暖化が進んでいる今、ゴミの分別をしっかりとする。食品廃棄量を減らすために食べ残しの無いようにする。

●女子生徒 A

【学習前】節水、節電

【学習後】食料の廃棄物を減らすために残さず食べる。気候変動などの現状を考え、なるべく排気ガスの多い車に乗らず電車に乗るなど、自転車・歩きなどで出かける。

●男子生徒 B

【学習前】長時間労働、自殺

【学習後】地球環境を大切にしていくことや無駄のない物の使用など将来についてよく考える。

上記は主な生徒の記述しか載せることができなかったが、多くの生徒が学習前よりも学習後の方が単元を貫く問いに正対して答えることができていた。学んだことによる変化は、授業者の私にもわかったが、何より生徒にとって実感

の湧くことに繋がったであろう。

本単元ではベトナムの現状を学ぶとともに、ベトナムと日本双方が抱える課題・問題を漠然と捉えるのではなく、SDGsの観点から捉えさせた。2つの国のそれぞれの課題が17の目標のどれと関係しているのかがわかったことに加え、SDGsは発展途上国の問題ではなく、先進国も関わりのあることだと認識できたことが大きな成果だと考える。また、アクションプランを通じて、自分自身もできる行動を示せたことで、SDGsが「国連が定めた遠い世界のこと」ではなく、「自分たちにもコミットできること」ということが認識できたことも大きい。

一方で、生徒が示したアクションプランがただの宣言になっていないか、という問題もある。環境問題や国際社会問題に対して個人がコミットできる範囲はそう大きくはないであろうし、個人の活動が問題全体にすぐに影響を与える可能性も大きくはない。だからといって個人ができることを放棄してよいことには繋がらない。学校の授業では、「僕はこういうことをやって

いきたいです」「私はこういうことで貢献したいです」という個人目標がある程度のゴールになりがちである。しかし、実際はその先の行動が伴わなければ意味がない。今回の実践では、あくまで生徒がSDGsを知り、自分自身ができる行動を考えることを一つの終着点にした。現勤務校では、持続可能な社会の実現するためのアクションプランを授業だけでなく、学校と社会を繋げる場面へも広げていき、前勤務校の課題を活かしていきたい。

<参考文献>

- 田中治彦 他 (2016) 『SDGs と開発教育: 持続可能な開発目標ための学び』 学文社
- 日能研教務部 (2017) 『SDGs 2030年までのゴール』 日能研
- 堀哲夫 (2013) 『一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』 東洋館出版社
- 川嶋直 (2013) 『KP法 シンプルに伝えるプレゼンテーション』 みくに出版